

イーストウッド監督のNo.1は？

先日、本誌の担当者2人とお会いした。課長が新人の編集者を紹介するというので、「はじめまして」の挨拶のあとスイーツを食べながら映画の話などをした。

私を取り上げたのはクリント・イーストウッド監督の諸作品。御年87歳にしてなお精力的な活動を続けている斯界のレジェンドだが、かつて私はこの人が嫌いだった。監督になる前に演じていた当たり役ダーティ・ハリーのイメージが好みに合わず、「汚らしい俳優」として敬遠していたのだ。

還暦を過ぎてから『許されざる者』『ミリオンダラー・ベイビー』などでアカデミー監督賞や作品賞を獲得し、名監督として歩み出してからも長く無視していた。第一印象とはこわいものである。

その後たまたま彼の監督作をテレビで観て印象が180度変わった。以来どの作品を観ても完成度の高さにうならされるばかり。

ということで、「先入観に囚われてはいけませんね」などと反省の弁を口にした次第だ。

「本田さんの一押しは何ですか？」と聞かれ「『グラン・トリノ』です」と即答した。

知る人ぞ知る名作だが、2人とも未鑑賞とのことだったので、少しだけ説明した。

イーストウッド演じるゴリゴリの偏屈じいさんが、隣に引っ越してきたアジアの少数民族の一家と友情を深めていく物語。はじめは毛嫌いして思い切り悪態をついていたのだが、やがては自分の家族以上に親密になり、さらには彼らのために衝撃的な献身を行う。

決してハリウッド的な大作ではないもののシンプルな物語の中に多くのメッセージがちりばめられた珠玉作だ。

人事コンサルタント 本田 有明

「ダイバーシティ」を尊ぶ心

このところダイバーシティ・マネジメントに関するセミナーの依頼をよく受ける。

ひとくちにダイバーシティといっても、ニーズは文字どおり多様だ。女性の活躍推進支援がメインとなることが多いが、育児・介護への共同参画や当事者へのサポート、さらには性的少数者や障害をもつ人、外国人労働者の差別なき受け入れなど、扱うテーマは個々に深い。最近は民間企業だけでなく、自治体での取り組みも急速に進んでいる。

「日本一女性が働きやすい、働きがいのある都市」の実現を旗印に職員の意識改革に取り組んでいるのは横浜市。隣の川崎市では2年後に開催される東京五輪のパラリンピックに重点を置き、人々の意識と社会環境からバリアを取り除く活動を「かわさきパラムーブメント」と名づけ、先導役になっている。

兵庫県宝塚市では、性的少数者の結婚を認めるだけでなく市の職員互助会（事務局は人材育成課）が祝儀を贈り支援している。

こうした事例は人口が多い都市部に偏りがちだが、地方でも独自色を出して取り組んでいるところは少なくない。本誌の1月号に「多様な人材を求めて」と題してレポートされた福井県越前市役所などもそのひとつ。

元お笑い芸人やモデルなど、さまざまな地域から社会人採用された職員の楽しい写真とともに仮想組織「IJU（移住）課」のエピソードなども紹介され、話題になった。

ダイバーシティという言葉にふれるたび、私は先の『グラン・トリノ』に想いを馳せる。相手に対する偏見を捨て、まずはよく知ろうと努めること。そこから予期せぬ展開に導かれことは映画の中だけに限らないはずだ。